

vol.4 C メジャーペンタを使う～その2～

さて、では今回は『これまで覚えたスケールを使う』という部分を重点的にやっていこうと思います。

『スケールが使えるようになる』と言うことは、自分のオリジナルのソロを作る時や、アドリブを行う際の、フレーズのバリエーションが増える、と言うことです。

やはりどんなことでも、最初は『真似る事(コピーすること)』から始まります。

『自分のオリジナル』と言うモノは、複数(2人もしくは2つ以上)の要素を真似て(習得して)、それらを良いバランスで上手く混ぜ合わせた(混ぜ合わせられた)時に生まれるもの。

そういったことを踏まえると、最終的に自分のオリジナルを作るには、『自分の中に他人の手法を取り入れる』という作業が必要になりますよね？

なので、世間では、『コピーが大事』と言われるわけです。

ですが、1つ注意しなくてはならないのは、『ただ漠然とコピーだけしていてもダメ』だと言うこと。

重要なのは『そのプレイヤーが何を考えて、どういう演奏をしているのか？』です。

そこをしっかりと分析できないと、一定以上、曲やフレーズのコピーをしても、『自分が演奏する時に、そのネタをどこで使ったら良いのかがわからない』という状況になります。

そう言ったことにならない様に、音楽的な分析、把握の為に、スケールや理論などといった『音楽の知識』が必要なのです。

と、いうことで、まずは覚えたメジャーペンタの使い方を学ぶ為、身体に覚えこませる為に、実際の楽曲を参考に練習してみましょう。

では、今回のモデルにする曲は2つ。

The Beatles (ビートルズ)の“Let it be”と、
Oasis(オアシス)の”Don't Look Back In Anger”という曲のギターソロです。

どちらの曲も、これまで覚えたCメジャーペンタの
重要ポジション主体のソロなので、良い練習になるでしょう。

本当は、原曲のソロを完コピするのが一番わかりやすいのですが、
著作権の都合上、完コピ譜を載せるとちょっとまずい可能性があるので、
譜例は原曲ソロをアレンジしたものにしてあります。

どちらかという、フレーズを真似た、というよりは、
指板上の動きを真似たものになっています。

感覚を掴めば原曲ソロも耳コピ出来ると思うので、
そういったことにもチャレンジしてみましよう。

※譜面作成ソフトの都合で、タブ譜では上手く表せない表現があります。
タブ譜だけを見ると、特にリズムがわかりにくいので、音符(オタマジャクシ)の方も、
よく見てみてくださいね。

モデル楽曲 Youtube リンク

The Beatles “Let it be”

<https://youtu.be/ajCYQL8ouqw>

Oasis ”Don't Look Back In Anger”

原曲動画

(ピッチがちょっと高いので、動画に合わせて弾きたい場合は444ヘルツ位で
チューニングしてみてください)

<http://youtu.be/r8OipmKFDDeM>

Live 動画

(こちらは440でOKですが、フレーズが原曲とちょっと違います)

<http://youtu.be/n4bMzztIRe0>

※どちらの楽曲も、万が一、削除されている場合は曲名で検索してみてください。

※フレーズを弾く前に、コード進行を確認しておきましょう。
コードバックিংを鳴らしながら練習した方が、ハーモニーの感覚が身につきます。

※DTMソフトやレコーダーなどを持っていない場合は、
[このブログの記事](#)を参考に、フリーソフトでバックিংを作って練習することをお勧めします。

The Beatles “Let it be”風、譜例 1

♩ = 60

S-Gt

mf

C G Am F

TAB

C G F C

The Beatles “Let it be”風、譜例 2

C G Am F

TAB

C G F C

full

Oasis "Don't Look Back In Anger" 風、譜例

$\text{♩} = 80$

S-Gt

F Fm C F Fm

mf

full fullfull full full fullfull

TAB

G G# dim Am G

full full full fullfull

full full full full full full full full

TAB

それでは今回は以上になります。

ありがとうございました。

大沼